

青年期女子の心理的両性具有に関する臨床心理学的研究

— 家族関係、友人関係に焦点を当てて —

心理臨床学専攻 加 塩 涼 子

I. 問題

個人がジェンダー役割を獲得していく過程は、社会化という観点で捉えられるものである（鈴木，2006）。しかし、自分自身に期待されたジェンダー役割を全て無批判に取り入れることは、必ずしも適応的なこととは言えない（森永，2004）。むしろ、他者によって望まれたステレオタイプなどの期待によって作り上げられてきた自分自身について見直しを行い、ジェンダーに縛られることなく真に「自分らしい」価値観によって、自己概念に取り入れられるパーソナリティ特性の再選択がなされることが望ましいとさえ考えられる（青野・森永・土肥，2004）。

そしてこのような自己概念の見直しが行われる過程においては、それまで最も重要な他者であった「親」から離れ「友人」へと接近していくような対人関係での変化が見受けられる（清水1989）。しかし、これは単に「親」から「友人」へのベクトルの変換としてだけ説明される現象ではない。青年が真に「自分らしい」自己の探索行動を行うとき、「親」との関係も「友人」との関係もともに変化の過程にあり、どちらもが重要な役割を果たしていると考えられるのである。

II. 目的

本研究では青年期女子のジェンダー役割の獲得において、ジェンダー・ステレオタイプに囚われない「自分らしい」選択がなされることが重要であると考え、この「自分らしさ」の形成と関係の深い要因がどのようなものであるか具体的に検討することを目的とする。そして、「自分らしい」ジェンダー役割の獲得がなされた状態については、「心理的両性具有」という状態像をその指標とする。仮説は以下の2つにまとめられる。

1) 心理的両性具有を形成しているものには、凝

集性と適応性がともに中庸でバランスのとれた家族関係を持つものが多いだろう。

2) 心理的両性具有を形成しているものには、同性の友人への深い自己開示を多く経験しているものが多いだろう。

III. 方法

1) 調査時期：2008年7月下旬～11月下旬。

2) 回答者：鹿児島県内の大学、短大、専門学校の学生308名。そのうち、10代後半から20代半ばまでの女子で、回答に不備がなく、かつ真摯に回答していると思われたもののみ250名を有効回答者とした。年齢分布は18歳から23歳まで、平均年齢は19.36歳となっている。

3) 調査方法：各学校にて講義終了後に個別自記入方式の質問紙を配布し、同会場内において直接回収を行った。回答はいずれも無記名で行われ、実施時間は約20分程度であった。

4) 調査内容：質問紙の内容を以下に列記する。

- ① フェイスシート
- ② ジェンダー役割タイプ測定尺度
- ③ 自己開示尺度
- ④ 家族機能測定尺度
- ⑤ アイデンティティ確立尺度
- ⑥ 自由記述

IV. 結果

1) 有効回答者の内訳：学校の種別では専門学校29名、短大41名、大学180名となっており、共学89名、別学（女子校）161名であった。また、全体に対人援助職を志向するものが多かった。

2) 心理的両性具有とアイデンティティの確立について：各ジェンダー役割タイプ間でアイデンティティ確立度の平均値の差の検定を行ったところ、これらの間に0.1%水準で有意差が見られた（ $F(3,246)=26.59, p<.001$ ）。さらに多重

比較を行ったところ、心理的両性具有タイプは他のジェンダー役割タイプのいずれよりもアイデンティティ確立度が0.1%水準で有意に高かった。

3) 家族関係とジェンダー役割タイプについて：家族タイプとジェンダー役割タイプとの間でカイ二乗検定を行ったところ、家族タイプとジェンダー役割タイプには5%水準で有意な差のあることが明らかとなった ($\chi^2(12) = 25.089, p < .05$)。残差分析の結果、心理的両性具有タイプの出現は家族の凝集性・適応性がともに高いタイプにおいて期待されるよりも5%水準で有意に多く、両方ともに低いタイプにおいて期待されるよりも1%水準で有意に少なかった。

4) 友人への自己開示とジェンダー役割タイプについて：自己開示得点について、ジェンダー役割タイプ間の比較を分散分析にて行ったところ、これらの間に0.1%水準で有意な差が見られた ($F(3,246) = 5.77, p < .001$)。多重比較の結果、心理的両性具有タイプはほかのいずれのジェンダー役割タイプよりも有意に自己開示度が高かった。また、開示領域ごとの自己開示得点についても同様の検定を行ったところ、「志向的側面」では0.1%水準で有意な差が見られ ($F(3,246) = 5.66, p < .001$)、「私的人間関係の側面(異性)」では1%水準で有意な差が見られた ($F(3,246) = 5.54, p < .01$)。そのほかには「外見的側面」「性的側面」「私的人間関係の側面(同性)」「実存的自己」の4領域でも5%水準の有意差が見られており、いずれも心理的両性具有タイプの自己開示度が他のジェンダー役割タイプよりも有意に高くなっていることを示すものであった。

V. 考察

仮説1：家族の凝集性・適応性がともに中庸であるときに心理的両性具有の出現率が増えるとする「カーブリーニア」は実証されず仮説は支持されなかった。むしろ、家族の凝集性・適応性のそれぞれが高いときに心理的両性具有の出現が増えるリーニア関係にあることが明らかにされた。

仮説2：心理的両性具有のものには、他のジェンダー役割タイプのいずれよりも自己開示を経験しているものが多かった。またその内容については、それが対人的・社会的な自己、セクシュアリティを伴った自己、そして、人生全体の展望を伴った自己など、青年が自己の役割の変化に対して積極的な対処を試みていることが反映されるような領域のものとなっていた。

以上の結果からこのジェンダー役割に関する「自分らしさ」の形成においても、従来、アイデンティティの確立として自我心理学や青年心理学の領域で研究されてきた「自分らしさ」の形成と同じく、家族関係や友人関係といった青年にとっての重要な他者との関係に大きな意味のあることが示唆されるものであった。

最後に本研究の問題点として、そもそも本研究で測定されている「心理的両性具有」という概念が時代や地域によって変化するステレオタイプに基づいて構成されており、非常に不安定なものであるという点と、その不安定な概念を「自分らしさ」の指標とすることによって、必ずしもステレオタイプに囚われていなくとも、自分自身の選択の結果として「男らしさ」「女らしさ」とされる特性を取り入れる可能性があることについては考慮されていないという点が挙げられる。これらのことから、「心理的両性具有」についてはあくまでこれまで伝統的とされてきたジェンダー・ステレオタイプに囚われていないという面においてのみ、「自分らしさ」の指標になると考えなければならぬだろう。

<引用文献>

- 鈴木淳子 (2006)：発達とジェンダー 鈴木淳子・柏木恵子 (著) ジェンダーの心理学培風館 pp.35-67.
 森永康子 (2004)：ジェンダーにあやつられて 青野篤子・森永康子・土肥伊都子 (共著) ジェンダーの心理学 [改訂版] ミネルヴァ書房 pp.92-116.
 青野篤子・森永康子・土肥伊都子 (2004)：ジェンダー・ステレオタイプの呪縛から自由になるために 青野篤子・森永康子・土肥伊都子 (共著) ジェンダーの心理学 [改訂版] ミネルヴァ書房 pp.142-157.
 清水弘司 (1989)：青年期 依田明 (編) 性格心理学講座第2巻 性格形成 金子書房